

M氏ノ運転シタ風景ノ記憶④

一九八七年、この年の桜の開花はとても早かった。

「仕方ねえべえ」

公衆電話のむこうの父の一言で四浪目が許された。

とにかく情けない思いである。父は国鉄の定年退職を控えていたのに……。
僕の浪人はやっぱり止まらないのだ。

とりあえず電話ボックスを出て、濡れたベンチに座り込んだ。

三月中旬なのに、桜は満開に近い。水たまりにはもう汚れた花びらが浮かんでいる。

上野公園の片隅で背中を丸めながら、小学校の頃に見た桜の桃源郷のことを考えていた。

僕が小学生の昭和四十年代、田舎だった福島 of 風景も急激に変化した。

道が次々と舗装され、わら屋根のほとんども、赤・青・黒・緑などのトタン屋根に改装された。風情が無いという大人もいたが、子供の僕にとつてはトタンに塗られたペンキの色が鮮やかでとても綺麗だった。そして、桜が満開になると、屋根の原色と桜の色彩は“絶妙な按配”になって、なんだか桃源郷のように思えた。

「あくあ、こんなの見ながら、何もしないで歳とりたいなあ」

と僕は父の前で独り言を言ってしまった。このあまりにも向上心の無い言葉に、
「お前は本当にダメだなあ」と父は本気で怒っていた。

一九八八年の桜は平年並の開花だったと思う。その年、ようやく僕の桜は咲いた。